



KONDO SEIICHI

文化の力で文明2・0の形成へ
—統合知による自然の「内部化」—

近藤文化・外交研究所代表

元文化庁長官 ユネスコ大使 駐デンマーク大使

近藤 誠一

緊急事態宣言解除後も新型コロナウイルス感染症予防対策は長期に続く。誰にとっても不便で苦しい毎日であり、経済や文化への影響も計り知れない。これだけのコストを無駄にしてはいけない。未来への投資として捉え、さもなければ気づかなかったことに目を向け、実現できなかつたであろうことを達成しなければならぬ。そのためには人類の歴史を大局的に捉え、今後定着していく「新しい生活様式」を、われわれの文明をより良い方向へ転換していく原動力にしなければならない。

1. 2つの世界

世界を地球という自然世界と、人間がつくった文明世界の2つに分けて考えてみる。

自然世界

自然世界では38億年前に誕生した生命が進化を続け、多くの種を生んで今日に致る。それを可能にしたのが生態系というシステムだ。

生態系は物質循環と食物連鎖から成る。自然界にある無機物(炭素など)が植物の光合成で有機物になり、草食動物、肉食動物の体内に移動し、やがて排泄物や遺体となって分解され、元に戻る。こうして有限の物質が無限に循環し、生命は永遠に保たれる。生命とは固定し独立したのではなく、「動的な平衡状態」(福岡伸一『生物と無生物のあいだ』)なのだ。

この生態系維持の鍵となるのが生物間のバランスと多様性だ。捕食者が餌の被食者を食べ尽くしてしまわぬようにその個体数が調整されることで、被食者と共存する。また種は変異を遂げながら環境変化に適合できる個体を常につくっておくこと、すなわち多様性をもつことで生き延びる。環境に適合しない種は淘汰される。生命が存続するための生態系の冷酷な摂理だ。

この生態系におけるキープレイヤーはウイルスなどの微生物だ。動物の消化を助け、有機物の分解を担う。これなしに物質は循環しない。それどころか生物がウイルスの遺伝子を取り込んで、自らの進化に役立てたり、ウイルスが哺乳類の胎児を、母親の免疫系の拒絶反応から守る働きをするなど生命の本質部分を握っている（石弘之『感染症の世界史』）。

人間世界

第二の世界は20万年ほど前に自然界に生まれた現生人類が創造した世界だ。思考力とそれを言語で伝達し合う能力によって、抽象的な概念を基にいわば「虚構の世界」（ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』）をつくった。自由、経済、国家などこの世界は人類の脳の中だけに存在する。

人類はこの世界で食料増産によって人口を急速に増加させた。統治（政治）や富の創造（経済）を合理的に進める理念体系をつくった。その代表的なものが自由と民主主義を基本とするリベラル・デモクラシーと呼ばれ

るものだ。人類はその下で「より速く、より高く、より強く」というオリ
ンピックの標語の通り、欲望を際限なく追求してきた。その思想的背景に
なっているのが西欧の普遍主義と進歩史観であり、科学技術の飛躍的進歩
がそれを支えている。人類はそれを使って権力闘争と経済競争という熾烈
な競争に終始するようになった。

2. 文明がもたらしたもの（コロナが気づかせてくれたもの）

コロナ危機は、はからずもこの文明の問題点を教えてくれた。

価値の一元化による多様性の軽視

人類はこの文明世界において進化を続けてきた。冷戦の終了により共産
主義に打ち勝ったりベラル・デモクラシーの下で、人類は国際協調による
平和と繁栄と幸福を永久的に約束されたと考えられた。

但しその後の国際情勢の展開をみると、この理念体系が綻び始める様相を呈してきたように思える。絶えることのない地域紛争、経済金融危機、温暖化、格差の拡大を主因とするポピュリズムの横行、トランプ政権の誕生、英国のEU離脱、そして新興国による戦後体制への挑戦などである。

しかしリベラル・デモクラシーの理念や制度自体に欠陥があるのでない。その中核にある合理主義と普遍主義が、相手の文化や歴史の多様性を軽視して一元的に押し付けられたことに起因する。途上国は英米モデルの強要に反感を抱き、先進国内では、拡大する一方の格差を前に、大衆が自分たちは「置いて行かれた」という不満を募らせた。それにも拘わらず、システムに裨益ひえきしている指導者は、ウォールストリートでの学生のデモに注意を払わず、理念の正しさを説き続けた。

それでも文明は自己修正力をもつので、新型コロナウイルスという人類共通の危機を契機に、それまでの対立を乗り越えて団結できるであろうと

の期待があった。しかし現実には逆に米中の対立を深め、EU内の亀裂を表面化し、中国の覇権意識を露わにさせるなど理念の修復どころか亀裂を深めている。誤作動に基づく核やサイバー戦争による人類の滅亡は、単なるSF映画の題材ではなくなった。

資本主義であれ民主主義であれ、指導者が制度の適用において地域や文化、個人の多様性を十分勘案して制度の柔軟な適用に心がけることで世界を正しい軌道に戻し、この理念体系への信頼度を回復させねばならない。リベラル・デモクラシーに替わる統治理念体系は見つかっていない。

生態系の破壊による温暖化と感染症

第二世界で発達した文明が第一世界に対して犯した罪は自然破壊である。農業革命以来、人類は文明の力とりわけ科学技術の力を道具として欲望を限りなく追求した。資源を乱開発し、都合のよい動植物を栽培したり家畜として増産するが他は乱獲し、多くの種を絶滅に追い込んだ。プラス

チックなど微生物が分解できない工業製品や新素材を大量につくって投棄することで物質循環を妨げた。産業革命と森林の減少が生態系のバランスを崩し、温暖化による異常気象をもたらした。得意の科学技術も温暖化を直接抑えることはできない。

そして新型コロナウイルスの蔓延も文明による自然への負荷増大に対する反応と言わざるを得ない。人類が人口を爆発的に増加させ、食料確保のために耕地や家畜を飛躍的に増やすことで食物連鎖バランスに負荷をかけた。そしてそれに生態系システムの維持を担っているウイルスが反応した。注目すべきは、文明の発展が、さまざまな形で感染症ウイルスの増殖に都合の良い環境をつくってきたことだ。森林伐採によって野生動物を人里に追い出して人間に感染症を移し、タカなどの天敵を減らすことでネズミが増えて病原菌をまき散らす。都市化や戦争時の塹壕などはまさに「3密」だ。ただウイルスは意思をもたない。人類を罰するつもりで感染力を強めてい

るのではない。生態系には善悪の「価値」は存在しない。ただバランスの自動回復機能があるだけだ。そして科学技術の粋をもってしても、超短期間の世代交代と変異を行うウイルスは撲滅できない。

人間性の劣化

近代文明の進歩がもたらす便利で、豊かで、安全な生活により人間は幸福になり、不安から解放され、善性を取り戻すはずだった。しかしコロナは人間性は進化するどころか文明に甘やかされて劣化してしまったことを気づかせてくれた。感染拡大に対する各国の反応を見ると、感染者や外国人に対する差別、偏見、意図的なデマなどの人間の醜さがかえって表面化している。そうした中で特にドイツのメルケル首相が3月18日の演説の中で、私たちが「どれだけ他の人の思いやりのある行動に依存しているか、それをエピソードミックは私たちに教えます」と言いつつ、団結を訴えたことが人々を感動させたが、逆説的に言えば、それほど市民の人間性が劣化し

てきているということなのかも知れない。

このように文明は第一世界を破壊して温暖化や感染症を発生させ、第二世界の適切な管理に支障をもたらし、人類を思い上がらせて対立や民族間の憎しみを煽って第二世界を限りなく危険なものにしつつあるように見える。習いたての魔法で楽をしようとしたが、魔法を十分コントロールできずに失敗した「魔法使いの弟子」を想起させる。

3. 文明2.0へ

以上のようなコロナが与えくれた気づきを、将来に向けてどのようなアクションにつなげていくべきだろうか。

自然破壊の停止

まず進歩や経済成長の名の下での自然破壊を止めることだ。科学技術の

力が食糧増産や新エネルギーの開発をもたらしたことで、自然資源はやがて枯渇するという危機感がなくなり、人類が自然の生態系に深刻な影響を与えているという自覚を失ってしまった。気候変動の激化に感染症が加わった今こそ、全人類が新たためて認識を深め、行動に移すべきだろう。第二世界が第一世界との共存なしに存続できないことは明らかである。

生態系の第二世界への「内部化」

とりわけ重要なことは、生態系維持を第一世界という「外」からの負荷として扱うのではなく、第二世界である文明に不可欠の要素として「内部化」することである。公害を外部不経済として扱っていた経済学が、それを内部化することによって、環境汚染の防止が企業経営の当然の柱になったように。

また生態系の理解を通して多様性の重要さを認識することは、自然界のみならず、単一の価値（合理主義）の一元的押し付けによって足元が揺ら

いでいる文明社会を回復させる上でも極めて重要である。

それには生態系の破壊を数値化し、SDGs運動のように企業の行動指針として政治と社会がしっかりと監視をすることが必要である。ESG投資のようなインセンティブの形をとることも必要であろう。プラスチックストローに代表される、物質循環を妨げる工業製品の廃止という明確な指針も必要である。

これらにより近代文明を、より持続力のある文明2.0へとグレードアップしていくことが可能になる。

4. 文明の転換に果たす文化の役割

「創造にかかわる経済」

近代文明が強みを生かしつつその弱点を補い、上述のような対策によつ

て持続的発展を遂げていくためには、いまや文明の持続的発展の足かせになっている普遍主義と進歩主義からの脱皮が必要である。しかし数百年にわたって西欧文明の中核として築き上げられてきた思想体系の基本を修正することは容易なことではない。

政治や経済界のリーダーシップが、現在の社会文化の中で簡単に実行できるとは思えない。第二次大戦やリーマンショックなどのこれまでのさまざまな危機への対応も、国際機関の設立であれ、国際金融制度の規制強化であれ、問題の根本的改革ではなく、いわばその場しのぎの制度改革に過ぎなかった。危機は再び起こり、将来も繰り返されるであろう。

ここで重要なことは、コロナが与えてくれたひとつの貴重な経験、すなわち「新しい日常」によって市民が社会の変容をもたらす力である。歴史において時代の大きな転換が成されたとき、その奥には一般大衆の中の変化に向かう時代の流れがあった。そして文化芸術がその受け皿となる。

2020年3月11日、ドイツのグリュッター文化大臣がフリーランスの芸術家への無制限の支援を表明したとき、彼女はこの支援は経済的な救済であるだけでなく、「文化の世界を救うこと」だと言明した。そして文化とは「創造にかかわる経済」の源であるとの趣旨を述べた。

文化は社会の大きな転換へのインスピレーションと実行へのエネルギーの源泉になるものだ。政治経済分野で既得権益をもつ支配層とは異なる価値観により、異なる手法で社会を動かしてこそ真の変革は実現する。それを担うのは思想家でありアーティストである。彼らこそが大衆の心の中に湧き上がる変革のマグマを敏感に察知し、概念化し、言語化し、作品化する。

文明と自然をつなぐ文化

すなわち世界が語り始めた「ニューノーマル」（新しい常態）とは、政治的改革でも、圧制に対する市民革命でもない。市民一人ひとりの日常生活での行動変容が持続することで、文明が徐々に変化していくことを予想

しているのだ。「ポストコロナ世界」をつくる主役は市民なのだ。

それは感染予防対策と経済の両立、ウイルスと人類の共存を持続させる技術と知恵の積み上げが新しい世界をつくることを意味する。この運動が向かう方向は2つある。ひとつは、科学技術による自然支配を一層進めようとするものだ。医学など科学技術の更なる進歩によって人類が疫病や死から自由になり、他方で仕事はすべてAI（人工知能）がやるという方向（ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス』）である。2つ目は自然と一体となる文明が生まれていく方向である。われわれが目指すべきは勿論後者である。それを可能にするのが文化である。

目指すべきは白か黒かの二元論の軛を脱し、白と黒の共存、一体化である。ウイルスとの共存を図る「新しい生活様式」はその長期にわたる実験である。その間に世論に刺激を与え、その動きをプッシュする文化芸術の担い手たるアーティストの役割が見直されなければならない。今の日本には、

アーチストとは「癒し」を与えるかも知れないが、金を消費するだけで価値を創造せず、従って社会の役に立たない存在であるという風潮がいまだに強い。150年前に西欧の文明を取り入れる際に、その物質主義、合理主義の迫力に驚愕したあまり、文化の価値を過小評価したまま今日に至る。しかしドイツの文化大臣が述べたように、西欧には経済が社会の成長と発展に寄与するように、文化は社会の「創造」に貢献するものであり、だからこそ感染症拡大防止のための行動制限により影響を受けたアーチストは、フリーランスであっても、国として保護すべきであるという哲学がある。日本は150年足らずで西欧の文明を消化した。彼らが文化に与える価値とそれを担うアーチストの支援哲学を学ぶのは、今からでも遅くはない。

日本文化の貢献

ポストコロナ世界の形成において、民族の価値感の象徴である文化の役

割が期待される中で、日本文化の可能性に言及しない訳にはいかない。日本文化の特徴は、自分と自然を一体視し、二元論や普遍性を嫌って中庸や曖昧さ、多様性を重んじる。また物事を固定化して考えず、移ろいを重視する。時間は一直線に進むのではなく、循環すると考える。季節の移ろいを愛でて俳句には必ず季語が使われる。自然の音をそのまま取り入れるオノマトペ（擬態語、擬音語）が豊富である。一日を昼と夜とに二分せず、昼と夜の間を連続的に変化する流れと捉え、とりわけその境を愛でる。闇から光への流れを朝朗（あさほらけ）、曙（あけぼの）、東雲（しののめ）など豊富な語彙で表現する。上述のように「動的な平衡状態」である生命の本質を理解した文化、すなわち自然との親和性が最も高い文化と言えるのではないだろうか。この文化が、文明と自然の共存の知恵を探り、蓄えていく「新しい生活様式」に貢献することは間違いないだろう。

結語…

日本では150年間文明の力に押され続けてきた文化が、文明をグレイドアップする力を発揮する時がきた。それは政治と経済のリーダーによる上からの「改革」だけではなく、庶民の日常行動の長期的変容と同期して初めて可能となる。

「新しい生活様式」とは、コロナ危機から脱するための一時しのぎではなく、生態系の冷酷なまでの摂理をしっかりと日常の経済・文化活動に「内消化」することで、自然と両立した「文明2・0」を達成するための重要なステップとなり得るものと捉えるべきである。そしてそのような運動を牽引する知的エネルギーになるものとして、自然科学、社会科学、人文系すべての叡知を結集した「統合知」(integrated wisdom)を確立することが必要である。戦う相手はウィルスではなく、これまでの常態の延長で済ませようという誰のころにもある安易な妥協なのだ。



Profile

近藤 誠一 《こんどう・せいいち》

1972年外務省入省。広報文化交流部長、ユネスコ日本政府代表部大使、駐デンマーク大使を経て2010年より13年まで文化庁長官。現在外務省参与、総理官邸「日本の魅力発信に資する書籍の翻訳出版事業」選定委員、近藤文化・外交研究所代表、TAKUM-Art du Japon 代表理事、日本和文化振興プロジェクト理事長、地球システム・倫理学会会長、人文知応援フォーラム共同代表、19年4月国際ファッション専門職大学学に就任。

主な著書は『世界に伝える 日本のこころ』（星槎大学出版会）、『FUJISAN 世界遺産への道』（毎日新聞社）、The Owl of Minerva and the Future of Japan, 2013, Kamakura Shunju 『ミネルヴァのふくろうと明日の日本』（かまくら春秋社）、「外交官のア・ラ・カルト」（かまくら春秋社）、「文化外交最前線」（かまくら春秋社）など多数。フランス国レジオン・ドヌール・シュヴァリエ章（2006年）、瑞宝重光章（平成28年度）など受賞

